

PHOTOS : HIRONORI SAKUNAGA

FASHION & BEAUTY PATROL

ファッションとビューティにまつわるワクワクをパトロール! 遊び心あふれるカタチでお届けします

生成AIが接客?
無人古着屋に行ってみた

「古着屋 ジャンボデンキ」は、今年3月に東京・久我山に誕生した無人の古着屋だ。電気屋の内装と外観をそのまま残したレトロな雰囲気ながら、ChatGPTを活用した音声システムによる、ちゃんとした接客も受けられるらしい。「チャット」待て、何だそれ。同店を「ビジネスの実験場」と呼ぶオーナーに話を聞いた。(編集部記者 美濃島匡)

「ジャンボデンキ」と書かれた青い軒先、昭和の家電製品を広告するPOP、レトロなストライプの壁紙——「古着屋 ジャンボデンキ」は、かつて地元で愛された電気屋の外観と内装、屋号をそのまま受け継ぐ無人の古着屋だ。運営するのは、デザイン会社ザ・カンパニーの橋啓介社長。普段はファッションや建設、医療とさまざまな業種のブランディングとデザインを手掛けている。

橋社長が同店を始めたきっかけは、知り合いが無人古着屋を運営していたことだった。「人件費も初期費用もそれほ

ど高くないし、自分にもできそうと安易に考えた」と笑うが、真の目的は他にある。「本業で小売店のロゴデザインやブランディングを手伝うこともあるのに、自分で店を運営していないことがずっと気がかりだった。自らの店で実績を重ねれば本業の説得力も増し、マーケティングやシステムの実験場としても使える」。たとえ売り上げが立たなくても、やる覚悟だったのである。

店内には約1000点の古着が所狭しと並ぶ。客はハンガーについたタグの色で値段を判断し、料金ボックスに現金を投函。小銭がないときは、ボックス横の両替機を使う。セキュリティは防犯カメラのみの、完全に性善説に則った店舗だが、盗難は「ほぼゼロ」というから驚きだ。「お客さんの計算違いや、金額の入れ違いによる料金のロスはある。それでも、悪意のある窃盗はない」。

久我山は橋社長が住み慣れた場所で、この地を盛り上げ

る思いも込めて出店した。電気屋の跡地を選んだのは、「昭和の雰囲気が残っていて、何より安かったから(笑)」。月間売り上げは70万～100万円で、年内には初期費用も回収する見通し。多店舗化の予定はないものの、地域活性化や、空き家問題の解決策になる可能性はある。「似た課題を持つエリアに横展開するのはアリ。元クリーニング屋とか、元居酒屋とか。頭に『古着屋』を付けるだけだから」。



住所: 東京都杉並区久我山4-50-1
営業時間: 10:00～22:00(金、土、祝前日は24時間営業)

橋啓介
ザ・カンパニー社長



1. 店内の陳列は、アパレル経験のある橋社長のパートナーが担当。仕入れは、同店のきっかけになった、知人の古着屋オーナーに任せている 2. 価格は300～3000円と格安。さらに半額セールも年に数回行う 3. 郵便受けを料金ボックスとして利用



同店ではデザインやシステムの「実験場」として、さまざまな施策を行う。その一つが、生成AIを活用した接客だ。ChatGPTと音声認識ツール、発話ツールを組み合わせで開発した独自システムで、タブレットに触れて質問すると、同店のマスコットキャラクター、ジャンボくんが音声で答えてくれる。「好きなブランドは?」と聞くと、「『ジャンボデンキ』ぽ。最高の古着が集まっているぽ」と100点満点の回答。「生成AIって何?」と続けると、「人工知能の一種で、テキストや画像、音声などを生成することができる技術のことぽ。ジャンボくんも生成AIの一部だぽ」と語尾の「ぽ」がうつりそうな返答だ。精度の高さが伺えるぽ。

